

赤犬子

松田平信 (1893・M26) 字楚辺 (13 : 46)

あー、昔^{んかし すび ぶらく}え楚辺^{いんろーすい いき}ぬ部落^いおよ、飲料^い水^いぬ少^いらさぬ、
水^{みず}ねー非常^{ひじょう}に困^{くま}とーたんでい。ウフカー^あんちん^{にかしよ}在^{みじ}い、
ソーガー^あんちん^{にかしよ}在^{みじ}しが、うぬ^あ二箇^あ所^あから水^あえ使^あとー
てーるぐとーしが。うっさ^たしん^{あとう}足^あらん。後^あんし^あイー
ガー^あでいしん^あ在^あんよ、うぬ^あイー^あガー^あるぬ、イー^あガー^あぬ
いー^あ上^あなかに大^あきな溜^あ池^あ掘^あやーに、あ^あんし^あうぬ^あ、雨^あぬ降^あ
い^あになか^あい水^あ貯^あえてい置^あちよーてい、うぬ^あイー^あガー
ん^あかい^あ濾^あ過^あし水^あえ飲^あり、な^あー補^あみとーたんでい。

あ^あんさ^あく^あと^あう、な^あ、水^あぬ^あ悪^あさる^あ原^あ因^あが^あや^あら、本^あ当^あ
の^あ泉^ある^あんし^あえ^ああら^あん^あく^あと^あう。楚^あ辺^あぬ^あ人^あお^あむ^ある^あ目^あぬ
悪^あさ^あぬ^あよー、男^あん^あ女^あん^あ、目^あぬ^あ赤^あり、楚^あ辺^あミ^あー^あハ^あガ^あ
ー^あん^あち^あ評^あ判^あや^あた^あんでい^あよ、楚^あ辺^あミ^あー^あハ^あガ^あー^あん^あち。

と^あころ^あが、屋^あ嘉^あん^あど^あう^ある、屋^あ号^あ屋^あ嘉^あん^あど^あう^ある^あ家^あな^あか
に、二^あ十^あ歳^あ頃^あぬ^あ一^あ人^あ女^あ子^あぬ^あ居^あた^あんでい^あよ。く^あぬ
女^あ子^ああ、同^あし^あ水^あ飲^あり^あ水^あ使^あてい^あん、な^あー目^あん^あ悪^あし
こ^あー^あね^あー^あらん^あ非^あ常^あに^あ美^あ人^あや^あた^あんでい^あ、く^あぬ^あ女^あ子^ああ。

あ^あんさ^あく^あと^あう、く^あぬ^あ娘^あぬ^あ、屋^あ嘉^あ美^あ人^あん^あち^あ評^あ判^あ者^あ
や^あた^あんでい^あ。く^あぬ^あ女^あお^あな^あー^ある^あく^あ美^あ人^あな^あた^あく^あと^あう、
部^あ落^あぬ^あ青^あ年^あん、他^あ村^あ、他^あ字^あぬ^あ青^あ年^あん、な^あー縁^あ談^あぬ
話^あし^あえ^あー^あわ^あや^あー^あ思^あてい^あ、夜^あ、昼^あひ^あっ^あき^あり^あな^あし^あに
青^あ年^あぬ^あ達^あが^あ来^あて^あー^ある^あぐ^あと^あー^あん。

あ^あんさ^あく^あと^あう、く^あぬ^あ娘^あえ^あな^あ、「あ^あ、か^あん^あし^あえ^あー
仕^あ事^あん^あなら^あん^あな^あと^あー^ある^あむ^あん^あ」^あん^あち、用^あ心^あ棒^あと^あう^あし^あよ、
犬^あ養^あた^あんでい^あよ、犬^あ。犬^あお^あ知^あらん^あ人^あぬ^あ来^あね^あー、ワ
ン^あワン^あ吠^あび^あや^あー^あさ^あー^あな^あか^あい^あす^あぐ^あと^あう。あ^あんさ^あく^あと^あう、
な^あー^あう^あぬ^あ屋^あ嘉^あぬ^あ娘^あえ^あ、な^あ、犬^あぬ^あ鳴^あち^あー^あね^あー、「ま^あた^あ誰^あ
ん^あ来^あさ^あや^あー^あ」^あん^あち、あ^あんさ^あー^あに^あ裏^あ門^あか^あら^あ逃^あぎ^あや^あー^あに、
あ^あんし^あ誰^あと^あう^あん^あ会^あわ^あん^あく^あと^あう。あ^あぬ^あだ^あー、う^あり^あが^あ飼^あな
た^ある^あ犬^あお^あ、屋^あ嘉^あぬ^あ赤^あ犬^あん^あち^あま^あた^あ名^あ前^あえ^あ付^あち^あよ^あー^あた^あん。

【共通語訳】

昔、楚辺の部落は飲料水が少なく、水にはとても困っていたそうだ。ウフカー、ソーガーというのがあって、その二か所からも水を使っていたが、それだけではとても足りなかった。後には、イーガーの上に大きな溜池を掘って、雨水を貯え濾過して飲み水を補っていたそうだ。

そういうわけで、井泉からの直接の水ではなかったから、水の悪いのが原因だったのか、楚辺の人はみんな目が悪くてね。男も女も目が充血して、楚辺ミールハガーと評判だったそうだよ。

ところが、屋嘉の一人娘だけは同じ水を飲んだり使ったりしても、目も悪くならずとても美人だったそうだ。

その娘はあまりにも美人なものだから、屋嘉美人と評判だった。字の青年はもちろん他字、他村の青年たちが、是非その娘と話してみたいと思ったのでしょうね。娘の所には昼夜ひっきりなしに、青年たちがやってきたようだ。

そうしたら、「もうこんな事では仕事もできやしない」と、娘は用心棒として犬を飼ったんだって。娘は犬が吠えると、「また誰か来ているのだな」と裏門から逃げて誰とも会わないようにしていた。娘が飼っているその犬は屋嘉の赤犬と呼ばれていた。

あんさーに、ある日、うぬ犬ぬ雨ん降らんしが、い
っペー濡りて来つよ、濡りていしつ。あん家んかい
けー帰て来つ、うぬ玄 関をうていワンワン犬ぬ吠び
やーさくとう。うぬ 養 とーる屋嘉ぬ 娘 え出じてい
ん 見ちやくとう、なー濡りていし、しちよーしが。あん
しが、うぬ犬お尻尾んいっペー振やー振やーしつ、い
っペーなー嬉さそーるぎさーしよ。しちやくとう、何
ぬ訳がやーんち、あんし立っち見じゆるうちねーうぬ
いの 犬お、「なー水ぬ有ん 所 私が見ちよーくとう、な
ーりか見しら」んどうるちむえーさーに、うぬ屋嘉ぬ
むすめ ちん すすくー
娘 ぬ着物ぬ裾啞やーなかに、うぬクラガーんどうる
とくま 所 ンかい添てい行じ。

あんし、クラガーぬ前え行ちーねー、直ぐ 中 ンか
いうぬ犬お行ちやーなかに、あんし水ぬ前んじまた
ワンワンいっペー吠びやーしちやくとうよ。うぬ屋嘉
ぬ 娘 えようやく 明りぬ有ん 所 まで一行じ、うり
から先え 暗さくとう、其処ん立っちよーてーるぐと
ーん。立っちやくとう、立っちよーるうちなかい、う
ぬ犬ぬ水ぬ 中 ンかい飛びんかーにバタバタ泳じさ
くとう、「あー、此処んかいうっさ水ぬ有んちやさや
ー」んち 考てい。

あんさーにあぬだー、早速くぬ屋嘉ぬ 娘 え家ん
けーかい帰てい、うぬ 事 字ぬ当役んかい 話 さくとう。
あんさとう、字ぬ当役んあんしえーなー早速 調査
しんじゅんち、調査ひちやくとう、なー水ぬいっペ
ーまんていよ。あん、うりから字総出 行ちさーに、
せいそう 清掃しち、あんさーに何不自由ぬーんぐとう、今日
まで一水が豊かに飲だんてい。楚辺クラガーんてい
しえーうり。

ある日、雨も降ってないのに、その赤犬はずぶ濡れ
になって家に帰って来て、玄関でワンワンと吠えたよ
うだ。屋嘉の娘が出てみると、赤犬は濡れた尻尾を盛
んに振りながら、とても嬉しそうにしているのだった。
これはどうしたことだろうと思っていると、赤犬は
「水のある所を見つけたから、さあ見せてあげよう」
と言わんばかりに、娘の着物の裾をくわえてクラガー
へ連れて行った。

そして、クラガーの前に着くと、赤犬はすぐにその
中へ入って行き、ワンワン吠え出したのだが、屋嘉の
娘はその先は暗いので明るい所で待っていたようだ。
そのうちに、赤犬がずぶ濡れになってやってきたので、
「ああ、ここにはこんなに水があるんだね」と、水が
湧き出ていることに気づいたわけだ。

それから、娘は急いで家に帰り、そのことを字の役
員に話すと、字の人たちがクラガーを調べることにな
った。そしたら、そこはもう水が豊富に湧き出ていた
んだって。その後、字総出でそこを清掃してその水を使
うようになり、その後は水に不自由することなく生活
するようになったそうさ。それが楚辺クラガーさ。

やか むすめ びじん いっぺー
屋嘉ぬ 娘 があんまりな一美人やくとう、うり大 変
な一忍でいんれーやーりる 男 ぬ居たしが、あん昼
ゆーる いん をう いー あと
ん 夜 ん犬ぬな一居ぎてい入やならん。後おうぬ
ぬきが やか むすめ みじく
男 あ、な一くぬ屋嘉ぬ 娘 がクラガーんかい水汲み
ーが行ちねー、自分ん水汲みんが行ち、あんしクラガ
ーぬ内をうてい縁談ぬ 話 すんち 考 てい、あい行
ぢ。さくとう、な一あんまり思わしくんいかんがあた
ら一、悪戯すんでいひちえーるふーじやるぐとーん、
くぬ 男 ぬ。

あんさぐとう、くぬ 女 ん、な一慌 ていやーに、
あんしうりが 後 から、水汲みーが 来 るまた 女 ぬ
をう 居たんていよ。うりが来てーれーな一大事な 事 ん
かい 生 じーてーるふーじやしが。うりが来くとう、
さいわ なの ぬが 幸 いに難お 逃 りてい。「あーとー、其処んかい入っ
ちえーならん、異風な 男 ぬ居んどー」んでい言ち。
あんさーに、外んかいうぬ 女 二人や出じてい待っち、
うんま うん きー ちゃー ぬきが ん
其処んかい出じてい来ねー如何ねーる 男 やらー見ち
んじゅんち、待っちょーてーるぐとーん。

あーんさくとう、な一道えー ちるあくとう、是非
うん ぬきが うん ちゃ
出じらねーならんしえー、うぬ 男 あ。出じてい来く
とう、な一平生からチラー、屋嘉ぬ 娘 ぬんかいな一
ちゅうもく ぬきが
注 目 そーる 男 やてーんてー。あんさぐとう、「あー、
いやーるやていなー、いやーやあんねーる 男 ぬるやん
な一」んでい言ち、な一うりから恥かちゃんていよ、
ぬきが
うぬ 男 あ。

な一、あんさくとう、あい、うぬ 事 字ぬ当役ぬ聞
かーなかに、とー今からあんしえー字内法 作 てい。
ぬきが かー みじく い し かー
女 ぬ井泉んかい水汲みーが行ちねー、直ぐ井泉ぬ
いりぐち ひだりがわ まる いし あ
入口なかに左 側 なかい丸い石ぬ在くとう、あい
ぬきが あたま に う
女 お 頭 ぬんかい荷い負しーねー、あぬガンシナンち
あ 有しえーや。あぬガンシナうぬ石ぬ上んかい置ち、あ
ぬきが なか うーき む うん みじ く ま
んし中んかいや 桶 ばかーん持っち行ち、水え此処
ぬきが む ち うんま けー
がえーまー持っち来っ、あんし其処からかみてい帰い
るぐとう。

また、屋嘉の娘があまりにも美人なので、どうして
も口説きたいと思っている男がいたが、昼も夜も犬が
いるので娘に会えなかった。それで、娘がクラガーへ
水汲みに行く時に、自分も水汲みに行ってクラガーの
中で思いを伝えようと考えていた。しかし、思うよう
にいかなかったのか、悪さをしようとしたらしいね、
その男は。

そしたら、娘はびっくりしたが、その後からクラガ
ーに水汲みに来た女がいたそだよ。その人が来なけ
れば、大変なことになっていたでしょうが、幸いなこ
とに難を逃れることができたんだね。「ああ、そこに
入ってはいけないよ、変な男がいるよ」と言って、二
人は外に出た。そうして、どんな男が出て来るのか見
てやろうと待ち受けていたようだ。

出入り口は一つしかないなので、その男はどうしても
そこから出なくちゃいけない。男が出てくると、以前
から屋嘉の娘、チラーに思いを寄せている男だった。
それで、「ああ、お前だったのか、お前はそんな男だっ
たのか」と言われて、恥をかいたわけさ、その男は。

そういうことがあって、それが字の役員の耳にも入
り、字で規則を作ることになった。女の人クラガー
へ水汲みに行く時には、ガンシナ（頭上運搬用の輪型
の敷物）は入口左にある丸い石の上に置き、クラガー
の中には桶だけをもって入ること。そうして汲んでき
た水は、ガンシナのある所で頭にのせて運ぶこと。

あんし、男ぬ水汲みーが来ねー、其処んかいガンシナぬ有る間 あ内んかい入っちえーならん。また男 あ、汲みが来ねー 桶 担みーる棒有しえーや。うぬ棒やうぬ石んかい立ていてい置ちよーてい、あんし 桶 ばかーん持っち行ち、此处まで一引提ぎてい来っ、其処から担みてい家んかい帰いるぐとう。あい、女んまた、其処んかい棒ぬ立っちよーる間 あ内んかい入っちえーならんち、字ぬ規則 作 やーなかに、あんしあぬだー飲だんでいぬ 話 やしが。

あんさーなかに、なーうぬ 男 あなー恥かちえーくとう、今度なーまたうぬ 女 恥かかすんち、うぬ 男 ぬ。「くぬ屋嘉ぬ 娘 え 犬ぬ子懐妊とーんどー」んち、彼方此方んじあびやーさくとう。なー、くぬ 娘 ン、な、うんにねー既に妊娠しちえーをうたんりっさー、ぬー。

なーうれー、ぬーあんさくとうなー犬ぬ子ていらむん 懐妊とーんどーんち、私にんかいかんしなー恥かかすくとう、くぬ 女 おな一夜逃げさーなかに津堅島んかい行ちよ。その赤犬子んどうる人お津堅島をうてい生まりてい、また元ぬ故郷んかい帰てい来っ、あんし其処をうていくぬ赤犬子お育ていてい。

あん、大人になたくとう、くりが中国んかいべんきょう 強しんが行ち、くぬ赤犬子でい。あんし、彼処から戻やーや、麦、豆、粟、黍、唐黍、うりから野菜ぬ野 蒜 ンち、うっさ、お土産持っち来っ。あんし、全員んかい普及し。あんし、穀類ぬ恩人んち、字民お考 てい。

さーに、旧ぬ九月ぬ二十日あ 毎年、赤犬子祭やんよ。うぬ場なかにお供え物お、うぬ五穀ぬうれーチャンポンし混ぜ飯炊ち、其処かいお供えし、今までいんなー盛んにやっている、うん、毎年あんしうりっし。

また、男の人が水汲みに来た時に、石の上にガンシナがある間は中へ入ってはいけない。そして、男の人が水汲みに行く時にも、桶を担ぐ棒があるでしょう。男はその棒を石に立て置いて、中へは桶だけ持って入り、汲んできた水をそこから担いで家に帰るようにということ。女の人でもまた棒が立っている間は、中に入ってはいけないという、字の規則を作って、クラガーの水を飲み水として利用したという話である。

そうして、その発端になった男は恥をかかされたので、今度は女に恥をかかそうと、「屋嘉の娘は犬の子を妊娠しているよ」と、あちこちで言いふらしたようだ。娘はそのとき既に妊娠していたようだ、ね。

犬の子を妊娠していると言いふらされた娘は、夜逃げして津堅島へ渡った。そこで生まれたのが赤犬子で、娘はその子を連れて生まれ故郷に戻って育てたそう

その後、成人した赤犬子は勉学のために中国へ渡った。そして、中国から戻ってくる時に、麦、豆、粟、黍、唐黍、それから野菜の野蒜を土産に持って来た。これらの五穀を広めた穀物の恩人として、楚辺では赤犬子を崇めている。

それで、旧暦九月二十日には、五穀を供えて赤犬子祭を行なっている。それは現在でも毎年続けているよ。

あんさーなかに、なー帰ていめんしえーいに 昔^{うんかし}
え道ん悪さるあくとう。那覇からん歩ちる 来^く
とう、疲^{ちゆか}りていがめんしえーたらー、嘉手納ぬ村内^{むらうち}
うてー転りよー。転ばーなかに、残いぬ品物お放り
らんしが、野蒜^{にーびら}ばかーじえ放りたんでい、其処んか
い。あい、うりんなー置^{うっ}ちゃん投ぎてい、ある分^{ぶん} 家^や
んかい持^むち来^ちつ。其処んかい放りとーしえー取^と
んたしが、「はー、此処ねー野蒜^{にーぶる}お生^みんなよー」んで
い言^いちやくとう、嘉手納字ねー野蒜^{にーぶらいつさいみ}一切生^{しなむの}らんどう
ぬ話^{はなし}。

あんし、うりから三線^{さんせん}、クバぬ骨^{ふに}さーに三線^{さんせん} 作^{ちゆく}
てい、あんし弦^{ちる}お馬^{うんま}ぬ尻尾^{しっぽ}ぬ毛^きさーに作^{ちゆく}てい
さんしん うとううん くにくに うちなーじゆー
三線ぬ音^{うた}出^でじゃち。あんし、国^{くに}々、沖繩^{うちな}中^{じゆー}、
ひがしかいがん にしがいがぬ みぐ ち うたさんしん
東海岸^{とうかいがん}から西海岸^{せいかいがん}んかい廻^{まわ}てい来^きつ、歌^{うた}三線^{さんせん}ぬ
ふきゅう はげ
普及^{ふきゅう}んかい励^{はげ}みそーち。

あんし、中城^{なかくしく}安谷屋^{あだにや}ぬ村^{むら}んかい差^さし掛^かかいる場^ば
なかに、水^{みじふ}欲^あくなてい、あん、水^{みじ}ぬ有^あん所^{ところ}見^みちよ
ーしが、み^み見え見^みちからん。あん、ある青年^{せいねん}が畑^{はたき}から
いっぺーまー でーくに かた ちゆー をう
大変^{たいへん}美味^{みじか}さぎさる大根^{だいこん}よ、担^{たん}みてい 来^きしが居^いたく
とう、うりんかい頼^{たぬ}でい、うぬ青年^{せいねん}んかい、「うぬ
だいこんていー わ くい みじふー
大根^{だいこん}ーち分^{ちぶん}きてい呉^{くれ}らんなー。なー水^{みづ}欲^ほさぬうり
やしが」んちやくとう、「いいですよ」んち。あんし、
うぬ青年^{せいねん}んなー道^{みち}んかい道具^{どうぐ}お下^{くだ}るち、あんし、鎌^{かま}
さーに皮^{かわ}や剥^むち、あんし中味^{なかみ}ばかー四^よちんかい分^わき
てい。自分^{じぶん}ぬ手^てぬひらんかい置^おちきてい、うぬ犬^{いぬ}子^こぬ
めーんかい、なま か やつ
前^{まえ}んかい、「今^{いま}やれーなー食^くみ易^{やす}さいびーさ」んちや
くとう。

「ああ、また親切^{しんせつ}な青年^{せいねん}だなあ」んち、赤犬^{あかいぬく}子^こ
かん 感じ^{かんじ}みそーやーに。あい、うぬ青年^{せいねん}んかい、「青年^{せいねん}、
なまえ ぬー せい い
名前^{なまえ}え何^{なに}んりが」んちやくとう、姓^{せい}や言^いやんよーい、
ただ「マツ」んり言^いちやんち。あんさーに、うぬ青年^{せいねん}
やー けー ん よ なか
お家^{おうち}かい帰^{かえ}てい行^いぢやくとう、「ああ、世^よの中にこん
しんせつ せいねん うむ
な親切^{しんせつ}な青年^{せいねん}もいるんだなあ」んち思^{おも}てい。あんさ
ーに、し「この青年^{せいねん}は将^{しょう}来^{らい}、役^{やく}に立^たつ人間^{にんげん}になる
だろうなあ」んち、言^いぬんしえー。あんさーに、こご
いー たびちぢ
と言^いながちー、また旅^{たび}続^{つづ}きてい。

赤犬子が五穀や野蒜を中国から持ってこられた昔は、道も悪いでしょう。那覇から歩いて来て疲れているのか、嘉手納で転んでしまっただけが手元から落ちてしまったんだって。その落ちた分はそのままにして、残っているのを家に持ち帰った。その時、落ちた分は拾わずに、「ここには野蒜は生えるなよ」と言ったので、嘉手納には野蒜はまったく生えないという話だよ。

それから、赤犬子はクバ(ビロウ)の幹を棹にして、弦は馬の尻尾を使って三線を作った。そして、歌三線の普及に励まれて、沖繩中、東海岸から西海岸を廻ったようだね。

中城安谷屋の村に差し掛かった時に水が欲しくなると、水を探したが見つからない。その時、ある青年が畑からとても美味しそうな大根を担いできたので、その青年に「その大根を一本分けてくれないか。もう水が欲しくてたまらないのだ」と頼むと、「良いですよ」と言った。青年は担いでいた道具を道におろして、鎌で大根の皮をむき、中身を四つに切って、手のひらに置いて赤犬子の前に差し出し、「これなら食べやすいですよ」と言った。

赤犬子は「なんて親切な青年だ」と感心して、その青年に「青年よ、名前は何か」と聞くと、姓は言わずにただ「マツ」とだけ言って、家に帰って行った。「ああ、世の中にはこんな親切な青年もいるのだな。この青年はきっと偉くなるだろうなあ」と思いつつ、ぶつぶつ何かを唱えながら旅を続けていた。

にしかがぬ くー しらかち はーま
西海岸んかい来やーなかに、瀬良垣ぬ 浜 をうて
やんぼるぶにこしら しんすいしき ひー
いよ、山原船 拵 やーに進水式ぬ日やたんでいよ。
あん、うぬ場ねーまた連れ子ん添とーしが、うぬ連れ
ご みじふー ふなだいく
子ぬ水欲さんち、あん船大工んかい、「なー連れ子ぬ
いっぺー水欲さそーくとうや、水分きてい呉らん
なー」んちやくとう。

ふにじえーく さんしぬ んー
うぬ船大工お「なに！」でいち、なー三線ん見ち
んだんしえーや。あん、うりん担み担みどう、し、で
ーくとう。「乞食みたいにうりし、いったーんかい分
きてい 呉る水え無ん」でい言ちやくとう、「ああ、
しかた あっ いぬくさま
そうかあんし仕方ない」、歩ちやがちーうぬ犬子様あ
しらかちみじふに い
「瀬良垣水船だなあ」んでい言ちそーやーに、また
あっ
歩ち。

たんちや はじ ちゃ うんま
また、うりから、谷茶ぬ端んかい来くとう、其処
やんぼるせんは うんま
をうていんまた、山原船接じうりしち。あん其処ん
たぬ うんま ふなだいく
かいうり頼だくとう、其処ぬまた船大工、「ああい
たくさん い
ですよ。沢山いただきなさい」んでい言ち、あんしち
やくとう、「ああ助かった」んち。あんさーに、「ああ、
たんちやはいぶに い
谷茶速船だなあ」でい言ちそーち。

やー また いー あっ ちゃ
あんし、家んかい又こごと言ちがち一歩ち来くとう。
ちゆ い しらかち ふに たび
うぬ人が言ちしえーんねー瀬良垣ぬ船えよ、むる旅
すいなぬ みじふに
ぬかーじ水難んはっちやかていよ、むる水船なてい。
たんちや ふに たんちやはやー
あんしが谷茶ぬ船え谷茶速んち、ちゃーるうりっ
すいなぬ あ い たび
しからん水難んかい遭わん、いっぺー良い旅でいち。

しらかち ふにじえーく にく たんちや
あんさくとう、瀬良垣ぬ船大工ぬ憎り、「谷茶ぬ
ふに い な ち わっ ふに や な
船んかい良い名あ付きてい、私た一船んかい悪な名
ち
あ付きてーくとう、うれー殺しわるやる」んち。

くる みじふあ いぬこ
あんさーなかに、殺する間際なたくとう、うり犬子
さま ち わる くとう
様あ聞きんそーやーに、「なんじゅ悪い事んさんし
わんくる
が、私殺すんちすんなー。あん、人に殺さりーしや
ちゆ くる
かねー、自分し始末すしえーまし」んでいち。

西海岸までやってくる、瀬良垣の浜では山原船の
進水式を行なっていた。その時、赤犬子は子どもを連
れていて、その子が水を欲しがったので、船大工に「子
どもが水を欲しがっている、水を分けて下さい」
と頼んだ。

すると、船大工は「なに！」と、見たこともない三
線を担いでいたので、「乞食のようなお前たちに分け
てやる水はない」と言った。「ああそうか、しかたがな
い」と、赤犬子は歩きながら「瀬良垣水船だな」と言
って、また先へ行った。

それから谷茶の方に来ると、そこでもまた山原船を
造っていた。そこでまた、水が欲しいと頼むと、そこ
の船大工は、「ああいですよ。沢山いただきなさい」
とだったので、「ああ助かった」と水をもらい、そこで
は「谷茶速船だな」と言われた。

そして、また、何かぶつぶつ唱えながら家へ帰った。
すると、赤犬子が言われた通り、瀬良垣の船は海に出
る度に水難に遭って水船となった。だけど、谷茶の船
は谷茶速船とあって、水難に遭うこともなく良い旅を
続けたそう。

そしたら、瀬良垣の船大工は赤犬子を怨んで、「谷
茶の船に良い名前をつけて、私たちの船には悪い名を
つけたな、殺してやろう」と赤犬子を追ってきた。そ
れで、殺される瀬戸際に立たされた赤犬子は、「何も
悪い事もしてないのに、私を殺すというのか。人に殺
されるよりは、自分で死んでやる」と、思ったのでし
ょうね。

あんさーに、^{なま}今ぬ^{みや}お宮ぬ^{いー}上んかいめんそーち、あ
んし、^{つえ}杖ん^ち突ちめんしえーたんでいよ。^{つえ}杖んかい、
「^{あかぎ}赤木アカヌクぬ ^{とう}ハベルなてい^い飛びわ ^{つえ}いちゃし
^{たず}訪にやい ^{ゆくいち}行方聞ちゆが」でい^い言ち、^{うたか}歌書ち、^{つえ}うぬ杖
んかい^う置ちよーてい、^{つえ}あん、^{いー}うぬ杖の上から、^{まー}何処ん
かいがめんそーち^{ゆくえ}ちらー行方なしやたんでい。

そうして、現在の赤犬子宮の上の方に行かれたが、
赤犬子は杖をついていらっしやったらしいよ。その杖
に、「赤木赤犬子が 蝶になって飛べば どのように
訪ねて 行方を聞こうか」という歌を書いて、その後
はどこへ行かれたのか行方知れずとなったそうだ。